

大和朝廷と蝦夷

古代では蝦夷は「エミシ」と呼びます。「エミシ」と名付けたのは当時の和人（日本人）です。最初は毛人とも書きましたが次第に蝦夷の字を当てるのが一般的になりました。

「エミシ」の意味の最初は強い人をさす言葉でした。

例えば飛鳥時代最強の豪族である蘇我蝦夷（ソガノエミシ）の「エミシ」は蝦夷の漢字を使います。悪い言葉ではありませんでした。

それがよからぬ者とか乱暴者、まつろわぬ人たち（従わぬ）、あらぶる人たち、更に辺境の異民族をさす言葉に変化していきます。

それにつれて古代に東北（地方）に住む人たちを「エミシ」と呼び蝦夷の字を当てはめました。蝦夷の字は、蝦は「海老」で、夷は中国で異民族をさげすんで「東夷、西戎、南蛮、北狄」と言っていました。東夷の「夷」をとってきたものでしょう。

出羽国（山形、秋田）の蝦夷を夷狄（イテキ）とも言います。

東北の人たちが大和朝廷（大和王朝）の統治下にはいることに抵抗し反乱を起こすことからこのような字が用いられました。

奈良時代、平安時代は大和朝廷、和人からの蔑称でした。東北の人たちは自らを何々と名乗りませんでしたのでこの名前が定着します。奈良時代には更に降伏した蝦夷は俘囚（フシュウ）とか夷俘（イフ）とか言われていました。

平安時代に入り大和朝廷は東北の人たちはすべて和人（日本人）であって蝦夷、俘囚、夷俘と呼んではならないと御触れを出し差別解消をはかりました。

蝦夷は鎌倉時代以降「エゾ」と呼び北海道のことをさす言葉に変化します。当時北海道は古くは渡島（わたりじま）とよばれ日本国の意識はありませんでした。

「エビス」も「エミシ」からの転化で東蝦夷・夷（あずまえびす）と書き表わし、東国（関東）の武骨者の武士を京都の人が呼びました。鎌倉時代からでしょう。

それでは本題の東北の蝦夷「エミシ」の話です。

本州、九州、四国の勢力の内、大和朝廷の全国制覇に対し最後まで抵抗したのが東北の人たちでした。それ故に蝦夷と蔑称で呼ばれました。

大和朝廷（大和王朝）がどのように起ったかは種々説があるところですが、まあ大所です。

中国の漢書では紀元1世紀倭人（日本人）は百余国に分かれていますと記載されています。

三国志の魏志倭人では倭国は邪馬台国の女王卑弥呼を盟主とする29か国の連合王国であるとされ、中部、関東には別に^{くなく}狗奴国連合があるとされています。

邪馬台国の卑弥呼は3世紀中頃に没しています。この邪馬台国がイコール大和王朝かそして卑弥呼以前から大和国（奈良県）にあったのか、卑弥呼以後に大和国に移ったのかは説が分かれるところです。

古墳時代は3世紀中頃から始まります。この古墳は前方後円墳を中心に大和王朝のシンボルでこの文化は各地部族の首長が倣います。

これにより古墳時代から九州、中国、四国、中部、関東は大和朝廷の文化圏に入ったことが分かります。

更に大和朝廷は力をつけ、国造（くにのみやつこ）制をしき、地方の部族の首長を国造に任命して連合王国の大王になりました。国造は郡規模の首長です。

同盟の盟主であった大和（邪馬台国）は九州、中国、四国、中部、関東を制覇して連合王国を結成したのです。5~6世紀中頃のことです。

古事記や日本書紀に見える神武天皇の東征や、日本武尊（ヤマトタケル）の関東、東北の遠征の記事は物語的で個別の内容は定かではありませんが、大筋ではあっているのかもしれませんが。

その頃の東北はどうなっていたかです。後掲の地図を参照してください。

先ず東北の位置ですが、現在の東北六県です。南から太平洋に面する福島県（茨木県の北）、その西どなりで北へのびて日本海に面する山形県、福島県の北で太平洋に面する宮城県（西が山形県）、宮城県の北で太平洋に面する岩手県、岩手県の西で、山形県の北で日本海に面する秋田県、岩手県と秋田県の北で津軽海峡に面する青森県となります（北海道は含みません）。

日本国で占める割合です。当時は日本に北海道は含めませんので、東北六県（現在の行政区）から北海道を除いた日本に占める割合は23パーセントです。

古代から江戸時代までの行政区は現在の秋田県と山形県が出羽国、福島県、

宮城県、岩手県、青森県が陸奥国（ムツ）です。但し岩手県が陸奥国の統治下にはいったのは平安時代の初期で、青森県が陸奥国の統治下に入ったのは平安時代の後期です。

日本列島では弥生時代が紀元前5世紀前後に始まり、水田稲作が始まりました。その頃の日本は温かく東北でも水田稲作が普及し始めましたが、だんだん氷期となり、紀元1世紀には東北北部では水田稲作が出来なくなりました。縄文時代へ逆戻りです。狩猟、採集、漁労での生活です。

この生活では水田稲作地帯に比べ一個集落の人口は少なく10人（一戸）から数百人で、全体人口密度は極端に少なく、地域国家の形成までは進みませんでした。

大和朝廷は水田稲作が出来ない土地の統治には興味がうすく、友好的に朝貢外交を受ける間接支配で充分でした（水田稲作が出来ない地からは租税収入が得られないので魅力がない）。

しかし6世紀には水田稲作が出来る福島県、宮城県南部あたりまでは侵出して直接統治し、国造（クニノミヤツコ）制をしることに成功していました。これ以外の東北の地は大和朝廷の統治外の地です。

ところが7世紀に入り、日本は温暖期になり、東北の中部、北部（山形、宮城、岩手、秋田、青森）にも水田稲作が再び可能になりました。

7世紀中頃、大和朝廷は東北南・北部の地方を制覇して水田稲作の普及をはかろうとします。統治地域の拡大をはかったのです。

侵出の方法は統治地域の北の統治外地域に城柵を設けて拠点とします。この拠点を中心に、原住民の蝦夷（エミシ）と関東地方等から移民を連れてきて開拓して水田稲作を普及させます。

水田耕作が軌道に乗った所で国、郡、郷（里）、を設置し、国司（守、介など）を送りこみ、その地域の大和朝廷の統治が完了となるのですが、そう簡単には東北の北部まで侵出は出来ません。

蝦夷の抵抗、反乱が起り、奈良時代の初めと特に後半で東北は混乱します。

大和朝廷はいくつもの反乱を制圧して、最後は有名な征夷大將軍坂上田村麻呂の登場によって、平安時代の初めに族長阿弭流為（アテルイ）が率いる蝦夷の集団は降伏します。

大和朝廷は統治領域を現在の盛岡市と秋田市以南の線まで北上させこれ以上の侵出はやめます。

当時の桓武天皇が戦費抑制策に転じたからです。

青森県まで大和朝廷の統治下に入ったのは平安時代の末に奥州藤原氏の力によるものです。

以後平安時代には、蝦夷の子孫と名乗る安倍氏と清原氏が大和朝廷の官人として、又現地荘園領主として勢力を持ちます。

余りにも安倍氏の勢力が強くなったので朝廷は安倍氏を討伐します。これが11世紀後半に起きた前九年の役です。源 頼義が朝廷軍として一族と関東の武士団を率いて安倍氏を討ちます。安倍氏は滅びます。

そしてこの役で功労のあった出羽（秋田）の清原氏が奥羽、出羽を勢力下におきますが、清原氏の内部分裂で後三年の役がおきます。源 頼義の子の義家が中に入り、清原清衡が清原氏の後継ぎとなり、名を変えて藤原氏を名乗ります。以後奥州藤原氏として朝廷の枠組みの中にあるとは言え、東北を実質支配し、強い勢力を鎌倉時代初めまで持ちます。

この奥州藤原氏討滅したのが源 頼朝です。

頼朝は関東、東北を完全制圧したのです。

安倍氏、清原氏（藤原氏）も蝦夷の子孫と名乗っていましたので、ここまでが蝦夷の歴史でしょうか。藤原氏は蝦夷の出身ではないとの説もあります。

この後の東北は古代の関東等からの移民そして鎌倉時代以降は関東からの入ってきた守護、地頭の一族と百姓、戦国時代以降は関東の武将が地盤を作り、蝦夷と言われた人も日本人に同化されてしまいました。

その後蝦夷は「エミシ」ではなく「エゾ」と呼び北海道を指す言葉に変わりました。

大和朝廷が東北を統治下に置くための侵入政策は地元人々からの多くの抵抗があり、統治後も反乱がありました。これについては別稿でお話したいと思います。

以上

2020年3月14日

梅 一声

東北地方の略図

